

評価部会から幹事会に検討を依頼された案件について

平成 24 年 12 月 21 日

平成 24 年 11 月 20 日の第 88 回幹事会にて、評価部会から幹事会に検討を依頼することとなった案件について審議が行われた。その審議結果は以下のとおり。

1. 植物体内運命試験の記載について

【内容 1】

① 投与された放射能の放射活性に関する記載ぶりについて

本来放射能濃度の記載単位はベクレル (Bq) であるが、農薬専門調査会においては残留放射能濃度として、残留放射能をその比活性から換算した値 (mg/kg) を、換算量であることを明記しつつ記載してきたところである。

一方、原発事故以来、世間での放射能濃度の表し方はベクレル (Bq) であることが常識となってきたことから、この表記について再検討すべきではないか。

【具体的な提案】

A) 下線部分について

評価書の本文中の「Ⅱ 安全性に係わる試験の概要」の中に『放射能濃度および代謝物濃度は、特に断りがない場合は 親化合物 に換算した。』とありますが、残留放射能をその比活性から換算した値 (mg/kg) を明記したとはありません。「放射能濃度および代謝物濃度は、特に断りがない場合は比放射能 (質量放射能) から親化合物に換算した値 (mg/kg or µg/g) を示した。」としてはどうか。

理由: 特に表中の総残留放射能濃度 (mg/kg) の表示が気になること、本来、残留放射能濃度の単位は Bq/kg であることなどから。委員会で便宜上放射能濃度として mg/kg を使用する分については問題はありませんが、公表する資料については正しい説明が必要と考える。

【審議結果 1】

「Ⅱ 安全性に係わる試験の概要」の本文の記載を、「放射能濃度および代謝物濃度は、特に断りがない場合は比放射能 (質量放射能) から親化合物に換算した値 (mg/kg 又は µg/g) を示した。」に改訂する。

【内容 2】

B) キュリー (Ci) ではなくベクレル (Bq) に

「植物体での原体処理条件として、処理放射能は 28 日までに採取する樹では 1,410 KBq/樹、65 日後に採取する樹では 15,200 KBq/樹であった」ことを追記してはどうか。

【審議結果 2】

現在の表記を維持し、処理放射能については記載しない。

なお、特に処理放射能を記載する必要がある場合には、単位は Bq とする。

【内容 3】

② 評価書中の放射能濃度の記載について

評価書の本文中において、%TRR (または%TAR) と mg/kg が併記されていることがあるが、表中では%TRR (または%TAR) と mg/kg の両方が記載されていること、内容的には暴露評価対象物質を選定するという観点から%TRR あるいは%TAR ベースで議論されていることから、特段の理由がない限り、本文中では%TRR (%TAR) のみを記載することとすればよいのではないか。

ただし、放射性同位体を用いた試験により残留濃度を測定する場合は、核種、比活性、同位体半減期に注意を払う必要があり、%TRR あるいは%TAR のみで判断できるものではない点には留意が必要であり、この際には残留濃度 (mg or µg/kg) を記載する必要がある。

また、評価書において、「放射能濃度」と「残留濃度」という用語が混在しているように見受けられるが、%TRR あるいは%TAR で表示する時は「残留放射能濃度」、mg/kg で表示する時は「残留濃度」と記載することとしてはどうか。あるいは、二つをあわせて単に残留量とすることも考えられる。

【審議結果 3】

評価書中では、以下のように取り扱う。

- ・ 表中には可能な限り mg/kg と%TRR を併記する

本文中には%TRR (または%TAR) のみを基本とし、残留濃度については 10%TRR 超で残留濃度が極めて低い場合 (0.01 mg/kg レベルの場合) にのみ記載する

- ・ 用語の統一は検討課題とし、表現ぶりについては今後更に検討する。